



# 音の散歩路

— 両国界隈・江戸の音 —



写真-1

JR 総武線・両国駅を降り立つと高架下に響く電車の発着音と駅の階段を利用した相撲甚句の唄声が耳に飛び込んできた。(写真-1)大相撲の本場所中ということもあり、甚句会を結成した一般の愛好者が交代でのどを披露していた。相撲甚句は江戸の昔から力士によって唄い継がれてきたという。

さて、武蔵・下総の接点に位置する両国であるが、両国と“音”とえば、何といても大音響とともに夜空に開く大輪の花～隅田川の花火であろう。1732年(享保17年)全国的な凶作・コレラの流行で多くの死者が出たが、この慰霊と悪疫退散のために八代将軍吉宗が翌年挙行了した水神祭りの余興としてはじめられた。その時の花火師が例の「鍵屋」「玉屋」である。当時は



写真-2

20発前後の打上げ記録があるが、現在は2万発という。両国駅から京葉道路に出て両国橋の方向に少し歩くと左側に「両国花火資料館」がある。(写真-2)花火の構造や打上げ筒、花火秘

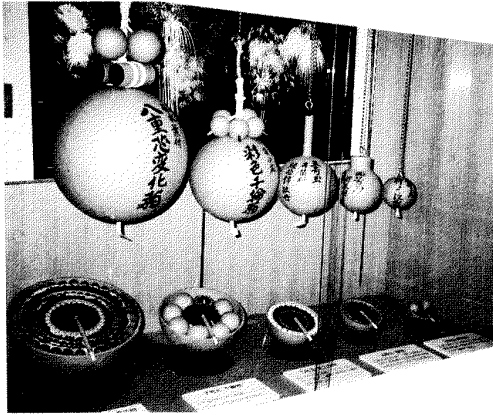


写真-3

法帖といった古文書が展示されている。(写真-3)

少し戻って回向院に立ち寄ってみるのもいい。1657年(明暦3年)の振り袖火事の死者10万8千人余りを弔うために建立された。ビルの谷間のお寺であるが、江戸古典芸能の一つである人形浄瑠璃を集大成した竹本義太夫の墓がある他、鼠小僧次郎吉の墓もある。(写真-4)

回向院の近所には「忠臣蔵」でお馴染み、陣太鼓の音とともに赤穂義士討入りの吉良上野介上屋敷跡(写真-5)、そして芥川龍之介が幼少期より府立第三中学校(現両国高校)卒業まで過した跡地の碑が立っている。(写真-6)吉良邸は二千五百坪の広大なものであったといい、当時の屋敷絵図面や錦絵も展示されている。龍之介は生後七ヶ月で母が病気になる、代わってこの地に住む伯父の芥川道章に育てられた。



写真-4

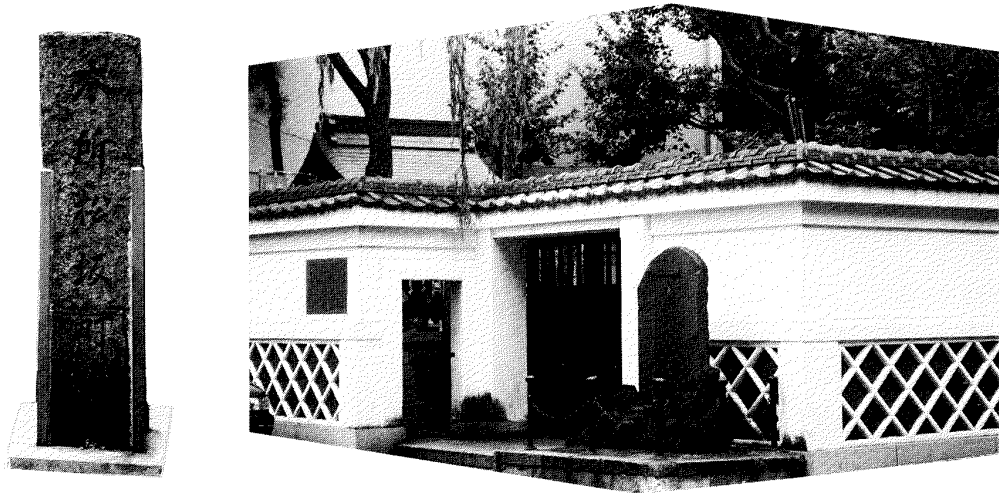


写真-5

次に隅田川に沿った万年橋通りを海に向って15分程歩き、俳人松尾芭蕉ゆかりの地を訪ねてみよう。(写真-7、8) 芭蕉記念館を見学し、芭蕉庵跡や史跡庭園を回るとよい。(写真-9、10、11) 芭蕉は1680年(延宝8年)この地に移り住み、芭蕉の株茂る芭蕉庵を中心に俳諧活動をはじめた。芭蕉庵跡は現在芭蕉稲荷となっている。大正6年の大津波の後、この稲荷付近から芭蕉が愛好したと伝えられる石造の蛙が出土したことから、後に東京府はこの地を「芭蕉翁古池の跡」に指定している。芭蕉記念館には出土した蛙の複製が展示されている。

その地に立って「ふる池や 蛙飛こむ 水の音」と、…いにしへの静寂な響に耳を澄ましてみるのも良いものであろう。

ここから駅に戻ろう。両国にはもう一つの顔がある。相撲の両国であり、駅の北側に国技館

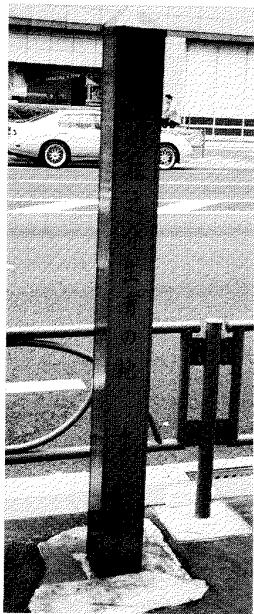


写真-6



写真-7

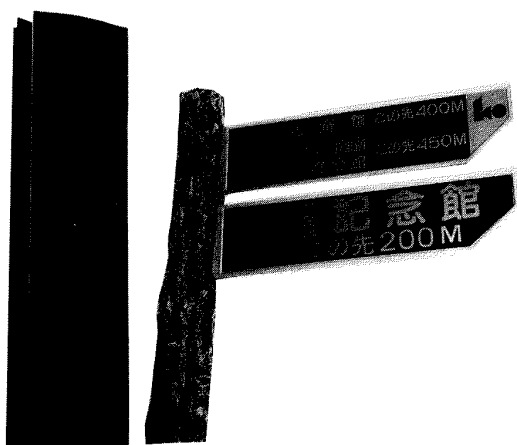


写真-8



写真-9

がある。(写真-12)国技館は音楽の町を目指す墨田区が音頭をとる5000人の合唱による第9コンサートの会場にもなっている。2月21日2時

より第15回が開催される。(写真-13)

散策に疲れたら国技館北側の旧安田庭園(写真-14)で一息入れた後、東京水辺ライン両国



写真-10

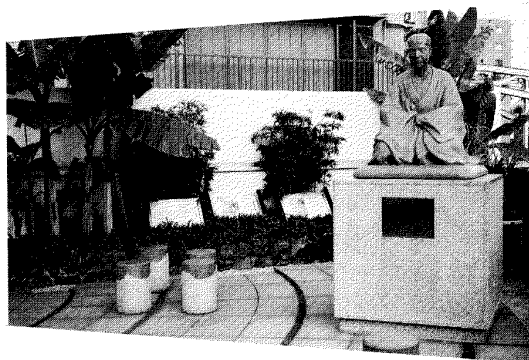


写真-11



写真-12



乗船場から水上バスで、臨海新交通“ゆりかもめ”の東京ビッグサイトの駅がある有明やJR京

葉線の葛西臨海公園駅に抜けるのも一興であろう。(写真-15)みどりの窓口や旅行センター等で乗船券を購入しておいたほうが無難である。

…隅田川の水面を眺めながら江戸の音に想いをはせる楽しい散歩路である。(財団 江沢記)

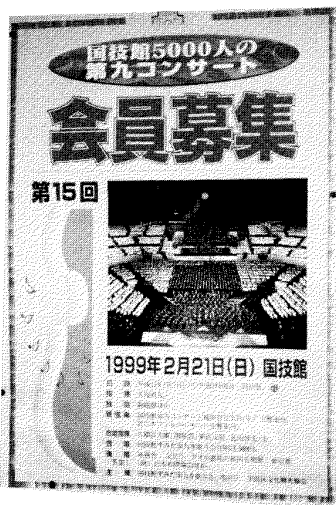


写真-13

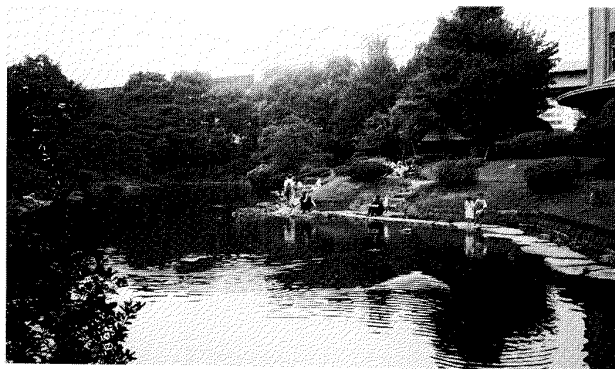


写真-14

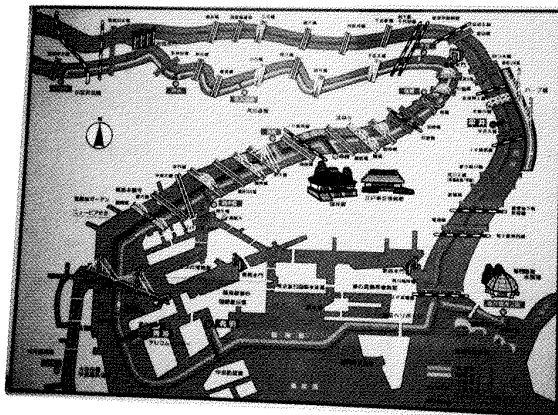


写真-15

